



災害精神医学ハンドブック

ロバート・J・ウルサノ,  
キャロル・S・フラートン,  
ラス・ウェイゼス,  
ビヴァリー・ラファエル 編  
重村 淳 監訳  
誠信書房  
2022年1月 420頁  
本体価格 5,400円+税

「災害は忘れたところにやってくる」という言葉があるが、最近の災害はいつ何時も忘れることなく発生しているように感じる。ただ、「災害は忘れたところに…」という直接の表現はこの文言を発したとされる寺田寅彦の著作にはなく、「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向がある」という事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防禦策を講じなければならない」という旨の文章が残っているとのことである。昨今の地球温暖化の影響によると思われる自然災害の甚大化があり、一方ではさまざまな科学技術の進歩に伴う高性能の爆発物によるテロや戦争などの人為的な災害もあり、その激しさは日々増しているという厳しい状況がある。

この災害による影響が増大する傾向への防禦策の必要性という寺田による前述の指摘は防災における心構えはハード面やソフト面にわたる災害対策の必要性を指すと考えられる。そのような災害がわれわれの心理・精神面に及ぼす甚大な影響を考えたとき、その対策について包括的・網羅的にまとめたテキストが求められる。今回取り上げたのは米国の災害精神医学の標準テキストである『Textbook of Disaster Psychiatry』初版の2007年から10年間の知見を加えて2017年に刊行された第2版の邦訳である。

本書においては通常自然災害に加えて、人為的な要因による災害に関して多くの頁を割いている。特に無差別な暴力であるテロの増加もあり、CBRNE災害という化学(C)・生物(B)・放射線物質(R)・核装置(N)・爆発物(E)について詳述している。そのなかには監訳者らによる原子力災害の日本での経験を論じた章も含まれている。CBRNE災害は特有の精神症状と行動反応を引き起こし、

個人・コミュニティにおける脆弱性・安全観・社会的団結に対して悪影響を与える(p.215)。このような災害は個々を分断し、子どもたちなど次世代への強い悪影響を生じさせる側面があるため、個人だけではなく、それらの状況に対して共同体として備えが必要である。

一般にさまざまな疾患についての対処とその予防の基本に一次予防、二次予防、三次予防の考え方があつた。これらに対応するように本書ではさまざまな種類の災害において、事前の備え、禍中での対応、事後の対策という形で時系列的にその対応を論じている。災害に伴う特有の精神面の課題(災害の種類やその強度がさまざまであること、個々の状況や症状が多様であること、支援者への援助も必要な場合があることなど)があるため、現状への理解が必要である。個々の災害における精神面への影響と被災者側の要因と症状、支援者・医療者側の要因を明確にしつつ、理解を促す必要がある。そのことが災害への事前の備え、禍中での対応に結びついていく。災害における精神面への対処については特にPTSDの治療が重要であるが、本書においてはさまざまな知見に基づいてデブリーフィングが無効もしくは有害であることを繰り返し記述しているほか、薬物治療について治療効果が認められた薬剤とともに治療効果の乏しい、もしくは無効であると報告されている向精神薬が具体的に記載されている点などが実用的な情報であると思われた。

ところで、本稿を執筆中の2022年2月にウクライナが侵攻を受けたことで世界全体が大きな衝撃を受けるに至つた。インターネット、SNSやマスメディアによりその被害の状況がリアルタイムに伝えられるのを視聴すると、今回の災禍のなかにCBRNE災害のすべての要素が含まれているように感じられた。本書では災害や付随する報道が当事者のみならず支援者や社会の精神的健康に大きな影響を与えることについて多くの知見を踏まえて述べられているが、災害が精神面に及ぼす深刻な影響を社会全体で正しく共有することが肝要である。そして今日まで培ってきた経験値を活かしつつ、個人のみならず共同体単位での相互協力により社会全体としてこころの防災力を育み、災害へのレジリエンスを高めることが求められている。

(谷井久志)